

Title	『瘦我慢の説』と『氷川清話』：勝海舟と福澤諭吉の間：(その二)
Sub Title	Yasegaman no setsu' and 'Hikawa seiwa' : the relationship between Katsu Kaishu and Fukuzawa Yukichi : (2)
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1998
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.90, No.4 (1998. 1) ,p.895(201)- 917(223)
JaLC DOI	10.14991/001.19980101-0201
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19980101-0201

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『瘦我慢の説』と『氷川清話』

— 勝海舟と福澤諭吉の間 —（その二）

飯 田 鼎

—

幕末から百数十年たった今日、それはどのような時代であったかと考えるとき、人はしばしば、歴史を溯って過去の時代のなかに現代を捜し求めようとする。現在の政治、経済および社会の閉塞状況を、五〇年前の第二次大戦の敗北、そしてさらに幕末維新に想いを致し、「第三の開国」などと表現することも珍しくない。要するに日本歴史における一大転換期ともいべき一八五〇年代から六〇年代にかけては、イギリス、アメリカ合衆国およびフランスを中心とする西欧列強諸国から、武力を背景とするいわゆる「外圧」によって開国を強要され、不平等条約と呼ばれた安政の条約の締結を余儀なくされるのであるが、この事実は、確かにわが国がヨーロッパ諸国の軍事的圧力に屈して条約を結ばざるをえなかった点では否定できない。

だが注意すべきことは、この条約が不平等条約で、従価関税五パーセントという、全輸入品目について一律適用の原則であったため、歳入の極端な減少という国家財政上の危機と、低廉な外国商品の流入によって、わが国内産業の育成が妨げられ、あるいは国際競争力を失うという重大な問題をひきおこした。しかしそれにもかかわらず、この条約は、「敗戦条約」ではなく、あくまでもアメリカ合衆国との間の「話し合い」に基づく「交渉条約」であったことである。

いうまでもなく、当時、尊王攘夷運動は熾烈をきわめ、水戸浪士をはじめ排外主義的な浪人などによって、外国人の殺傷が横行し、生麦事件にみるように国際問題化したことも少くなかったが、しかし条約の締結そのものにかんしては、交戦的行為は一切行われず、「一発の銃声も聞かず、一門の大砲も火を吹くことなく」、平穩裡に行われたことである。これを、英国が中国（清国）との間に結んだ南京条約（一八四二年）に比較してみよう。

南京条約は、三年間にわたるはげしいアヘン戦争の結果、清国が敗北して五港の開港をはじめ香港の割譲（九十九ヶ年の租借）を強制された敗戦条約であった。たしかに不平等条約という点では両者に共通しているが、決定的なことは、交渉条約としての安政の条約は、当事国間の政治的・経

済的な実力の差が反映され、不平等性が歴然としているとはいえ、交渉の前提は、あくまでも両者とも立場が平等であるという観点に貫かれていることである。これに反して清国にとって敗戦条約としての南京条約は、勝者としての英国による懲罰的な賠償要求が、その不平等性をいちじるしく濃厚なものとしている。安政の条約と南京条約、この両者には必然的に不平等性が伴っているけれども、その後の歴史的な経過からみても、この両者は、決定的に区別されなければならない。⁽¹⁾問題は、幕末日本は何故に、敗戦条約に追い込まれず、交渉によって強力な対向者を向うに廻して行動しえたのであろうか、という点である。

しばしば指摘されるように、アヘン戦争の結末とその屈辱的な講和条件が、すでに『オランダ風説書』⁽²⁾などによって、幕府上層部にはよく知られており、そうした適確な情報の入手が、危険な武力衝突を回避する戦術をとらせたことが考えられるが、何と云っても、交渉条約にもちこむ努力とともに、交渉における主導権の掌握の点で、当時の幕府首脳部には、なみなみならぬ才幹に恵まれた人物が多かったことが指摘されよう。

安政の条約には直接的には関与しないにしても、この時期に活躍して、日本の独立と名誉を維持するために活躍した岩瀬忠震^{ただのり}、川路聖謨^{としあきら}、永井尚志（玄蕃頭）等を考えるとき、「瘦我慢の説」において、福澤諭吉に激しく批判された勝海舟もまた、こうした転換期に生きた国際的感覚を身につけた政治家であった。そこで以下に、勝海舟自身の日記や書簡等に依拠しつつ、福澤との関係や両者の対抗関係を、同時代に生きて、勝の周辺で活動した幕臣や薩摩、長州などのいわゆる志士たちの活躍などを背景に、前稿にひきつづき、明らかにすることとする。

二

すでにのべたように、勝は、徳川政権の末期にあたって、官軍との間に和を講じ、「内乱の戦争を以て無上の災害、無益の労費と認め、味方に勝算なき限りは速に和して速に事を収むるに若かずとの数理を信じたるものより外ならず」として、福澤諭吉は勝海舟を論難した。結論的に言えば、「其心術の底を叩て之を極むるときは、彼の哲学流の一種にして、人事国事に瘦我慢は無益なりとて、古来日本国の上流社会に最も重んずる所の一大主義を曖昧模糊の間に瞞着したる者なりと評して、之に答うる辞はなかるべし」⁽³⁾（但し傍点は引用者）というのである。

ここに留意すべきことは、この一節は、瘦我慢の説が、三河武士の精神であることと同時に、福澤諭吉の哲学でもあることを吐露し、勝の哲学は、これとは全く相反することを示唆している点で

-
- (1) 加藤佑三「幕末維新の国際政治——福澤諭吉の訳稿を通じて——」。福澤諭吉協会編『福澤諭吉年鑑』20、平成五年、所収。なお、同氏『黒船前後の世界』、岩波書店、1985年、をもみよ。
 - (2) 拙著『英国外交官の見た幕末日本』、吉川弘文館、平成7年、を参照。
 - (3) 『瘦我慢の説』、慶應義塾編、『福澤諭吉全集』第六巻、564頁。

ある。してみると、福澤の哲学ともいうべき瘦我慢の説にたいして、勝自身のそれを対置することが必要であるし、その対比は興味深い。福澤も指摘するように、勝が「時として身を危うすることあるも之を憚らずして和議を説」いたとすれば、彼の行動が、瘦我慢は放棄したにせよ、武士道そのものに違背したものではなかったことは云うまでもない。

「慶応四戊辰日記」と題された勝の幕末における行動と政治情勢の変転を記した日記は、慶応三年十月（1867）から始まっているが、この時期は、すでに薩摩および長州藩を中心に討幕のための同盟および拳兵が行われており、薩摩藩にたいして討幕の密勅が下り、このような事態を察知した土佐藩は幕府にたいし、大政奉還を建白するとともに、將軍徳川慶喜も、將軍職の辞職を朝廷に奏請した時期に当たっている。勝は、慶応四年正月廿九日、この日記の冒頭に草した「序」においてつぎのように云う。

「小臣謹で考るに、皇国封建の制、古に適せりといえども、当時に適せず、久しからずして瓦解せん歟。顯要之官吏、宇内の形勢を察せず、従客として其陋習を固守す。外国交易盛成るに及では、終に昔時印度之古轍に陥らむとす。是、東洋誌邦之終に通るべからざるの大患也。高才卓識一世に冠たる士出づるにあらざれば、亦是を如何せむ。決して救ふべからざるの勢在り。況哉小節を守りて、是を是なりとして同属憤争するに於てをや。殊に痛哭悲歎に堪へず」⁽⁴⁾。

ここには、幕府の封建体制が危殆に頻し、一大変転の秋に遭遇しているにもかかわらず、幕府高官は世界の情勢を無視して鎖国という旧習慣を墨守し、このままでは、印度のように植民地化されることは避けられないとし、そのもっとも危険な兆候として、英仏両国による内政への干与、その結果として内戦が拡大、收拾することのできない事態に立ち到るのではないか、という切迫感が漲っている。

「近々五、六年、我官吏、私郎察之教化師カシュヨン（Mermet de Cachon のこと……引用者）と云妖僧に心酔し偏信して、我社稷を盛大〔に〕せむとす。是、何の所爲ぞ。英吉利人、其偏執あるを憤りて、西諸侯に結び、王政復古、諸侯を剝小して、郡縣之説を主張す。我官吏是を聞て、益、私郎に倚頼し、犄角之勢を保持せむとす。嗚呼今之事、何人之手に出づるや。我、是を弁せず。殊に悲歎して訴ふる処なし。終に今日大变に及ぶ」⁽⁵⁾。

勝は、長崎海軍伝習所において、オランダ人の教官カッテンディーケ（Willem Johan C. Katten-dijke）から、幕府海軍士官としての教育をうけた。オランダは、鎖国体制の下で、中国、朝鮮と

（４） 勝海舟『慶応四戊辰日記』、勝海舟全集1『幕末日記』、5頁。講談社、江藤淳、川崎宏、司馬遼太郎、松浦玲（勝海舟全集刊行会編集委員）、編纂 北洋社。

（５） 上掲、5頁。

ともに貿易を許された唯一の西欧の国であったため、勝が、その国の海軍士官から薫陶をうけたことは、当時、対日外交の主導権をめぐるはげしく対立していたイギリスおよびフランス両国の政策にたいして、客観的な立場で冷静に観察できたと考えられる。「我官吏^{ちんぐす}私^{ちんぐす}郎^{ちんぐす}察^{ちんぐす}之^{ちんぐす}教化師と云妖僧に心酔偏信して」という表現は、かなり辛辣で、イギリス公使パークス (Harry Parkes) に、より近い立場をとっていたように思われるかもしれないが、しかし必ずしもそうではない。幕臣で枢要な地位を占める者のなかに、栗本鋤雲や柴田貞太郎および小栗忠順のように、フランスの政策的意図のままに動かされる人物を見出し、危険視しているのもであって、その結果、西南雄藩へのイギリスの肩入れが濃厚となりつつあった状況を憂えているのである。勝はすでに、徳川家を中心とする幕藩体制が過去のものとなりつつある現実を直視し、「国民国家」日本を構想していたのである。この「序」の最後は、つぎのような文言で結ばれている。

「小臣至愚なりといへども、六、七年建言憤争、餘力を残さず、会津に説き、顯官に弁ず。是よりして、猜忌甚敷、身を置くの地あるなし。官軍侵撃、^{いよいよ}弥^{いよいよ}逼り到るに及では、達官^{はつり}奔^{はつり}て皆、其身を^{まも}保たふせんとし、主家の滅亡、万衆の塗炭を顧みず。君主（徳川慶喜……引用者）の卓識を誹謗し、遁辞之地とし、八方に散乱す。嗚呼、是何之心ぞや。大義名節之味ろき、終に滅亡してやまんとする歎。一身を潔きよくして、何之益かある。今世之評する所、昨は是にして今は非なり、亦何ぞ齒を容るるに足らむ。其大事に関係する処を以て日録し、帳中に蔵すと云」⁽⁶⁾。

印象的なのは、徳川慶喜にたいする評価である、「君主の卓識を誹謗し、遁辞之地とし、八方に散乱す」というのは、臣下としての儀礼的な言辞ではなく、心底からのものであることは、以下、日記の叙述によって知ることができる。

慶応二 (1866) 年七月、將軍家茂が大坂城で歿し、翌慶応三年正月、幕府は長州遠征中止の布告を発し、今や幕府権力の衰勢は覆うことのできない状態となった。当時、勝は越前藩主、松平慶永 (春嶽) の推挙により、軍艦奉行の要職にあったが、幕府内部の士気低下に嫌悪の情耐えがなくなっていた。

「当時之官員、聚斂甚敷して、下者之心を離せんことを憂ひて、^{しまり}頻に内命あり。志を奮いて忠諫せむとす。如何せむ、言語^{ごんご}壅塞して通ぜず。司農小栗上野 (勘定奉行小栗忠順……引用者註)、小野内膳 (小野友五郎……引用者註) が輩^{はつご}拔扈して、上者是に^{いよいよ}圧せらる。気を張て進言する者無く、雷同して党あり。此輩見る所、規模狭小にして、天下の大勢を深察せず、私^{ちんぐす}郎^{ちんぐす}察^{ちんぐす}に頼みて大いに国内を^ま平吞せんとす。誠に其力を量らずして、終に邦家の災を⁽⁷⁾発せむ歎」。

(6) 上掲、5頁。

(7) 上掲、7頁。

小野友五郎は、慶応三年、幕府の軍艦受取委員として渡米を命じられ、福澤もその一員として参加することを許され、帰途多量の外国書を購入して帰国、一時、小野の忌諱にふれたとはいえ、慶応義塾の英語教育に一大変革をもたらす機縁をつくってくれた人物であったが、勝からみると、小栗とともに国を誤る方向に幕政を導く張本人ということになろう。小栗に至っては、栗本鋤雲とともに、フランス公使レオン・ロッシュ（Léon Roches）やカションとの親交を通じて、ナポレオン三世の東洋支配政策にまき込まれるのではないかと、という危惧を痛感したのであった。

さて、この時期、福澤と勝とは、累卵の危機に見舞われていた幕府政治を背景に、どのような姿勢で、どこに日本の活路を見出そうとしていたのであろうか。福澤は、すでにのべたように慶応三（1867）年一月二三日、幕府軍艦受取委員小野友五郎一行の随員として、アメリカ合衆国東部諸州の都市などを見学、六月二七日帰朝したが、その前後から、幕府の政治について不安を感じ、きびしく批判的な態度をとっていた。それはたとえば、アメリカ渡航の船中で、同僚尺振八との間で交わされた大言壮語からも明らかである。もちろん『福翁自伝』は、最晩年の福澤が記憶を頼りに語っているので、厳密な正確さは期しがたいが、幕府の攘夷政策破綻の雰囲気は感ずることができよう。

「それからまたこういうことがある。同行の尺振八などと飲みながら、壯語快談、ソリヤもう官費の酒だから、船中のことで安くはないが、何かまうものか、ドシドシ飲み次第食い次第で、さっさと酒を注文して部屋に取って飲む。サアそれからいろいろなことを語り出して、『ドウしたってこの幕府というものはつぶさなくてはならぬ。そもそもいまの幕政の様を見ろ。政府の御用といえは何品を買うにも御用だ。酒や魚を買うにも自分で勝手な値をつけて買っているではないか。……それも將軍様が食うならばマアいいとするが、⁽⁸⁾そうではない、料理人とかいうようなやつが、ただ取ってきて、その魚をまた賣っているではないか』」

士気の低下は、まことに恐るべきものがあり、幕臣がその政府を信頼していないことは明らかであった。前年の慶応二（1866）年、『西洋事情 初編』を発行し、大きな反響を呼びおこした福澤が、徹底的な開国論者であったことは云うまでもないが、將軍家茂がこの同じ年の八月、大坂において歿し、慶喜が第十五代將軍となり後を嗣いだ。この政府が徹底的に攘夷をもって貫徹するのか、それともそれを捨てて、開国の方向へ舵取りをするのか、まったく判然としないことに、福澤や尺は不満であった。さらにつづける。

「この一事、推して他を知るべし、実に鼻持ちのならぬ政府だ。ソレもいいとしておいて、この攘夷はドウだ。自分がその局に当たっているから、よんどころなくしぶしぶ開国論を唱えていながら、其の

(8) 『福翁自伝』、岩波文庫版、162頁。

実を叩いて見ると攘夷論の張本だ。彼の品川の海鼠台場^{なまこかいば}、マダあれでも足りないといつて、こしらえかけているではないか。それからまた勝麟太郎が兵庫に行って、七輪みたような丸い白い台場を築くなんてなんだ。攘夷の用意をするのではないか。そんな政府なら叩き潰してしまうが宜いぢやないか……⁽⁹⁾」。

このような、いわば放言ともとれる福澤の言動は、やがて外国奉行から、「不都合の筋あり」として咎められることとなったが、このことはさておき、ここでも福澤は、既に幕府の要職についていた勝にたいして、不信の念を抱いていたことは明らかである。福澤の眼からみれば、慶応三年当時、勝もまた「しぶしぶ開国論を唱えていながら、その実をたたいてみると、攘夷論の張本人」とみえたにちがいない。しかし事態は、福澤や尺のように、いわゆる西洋通ではあっても幕政の中枢に位置していなかった者には、到底読み透すことができないほど複雑な経緯を辿りながら展開し、幕末の政治は、急角度に一大転換の方向に進展していったのである。

すなわち、慶応元（1865）年、イギリス、フランス、アメリカ合衆国およびオランダの連合艦隊が、兵庫（神戸）沖に集結、兵庫開港を幕府に要求、翌年、家茂の死去に伴う慶喜の將軍職就任、間もなく大政奉還の事おこり、世論の激動のなかで鳥羽伏見の戦いがひきおこされた。このわずか二年間にわたる歴史的な大転換の淵に臨んで、福澤等にとって事態が不透明であったのは当然で、徳川慶喜と彼を補佐すべき幕府の重臣にとっても、日本の前途は定かではなかったと思われる。

徳川慶喜が往時を懐顧して記録した『昔夢会筆記』によれば、鳥羽伏見の戦いに敗れる前後の事情について語っているところは興味深い。

「この時、予は風邪にて、寢衣のまま藤中^{じよくちゆう}にありしに、板倉伊賀守（勝静^{かつきよ}）来りて、將士の激昂大方ならず、このままにては済むまじければ、所詮、帯兵上京の事なくては叶うまじき由を反復して説けり。

予、すなわち讀みさしたる『孫子』を示して、『知彼知己百戰不殆^{かれをしりおのれをしればひやくせんあやみからず}』ということあり、試みに問わん、今、幕府に西郷吉之助（隆盛）に匹敵すべき人物ありやといえるに、伊賀守しばらく考えて、『無し』と答う。『さらば大久保一藏（利通）ほどの者ありや』と問うに、伊賀守また『無し』といえり⁽¹⁰⁾」。

慶喜が將軍職を襲いたとき、馬上ゆたかに三軍を叱咤しうる將軍として、大久保利通は、家康の再来ではないか、と畏怖したと伝えられるが、慶喜もまた、西郷と大久保を恐るべき英傑として評価していた。さらに慶喜は、つぎのようにつづける。

(9) 前掲、162頁。

(10) 『昔夢会筆記——徳川慶喜公回想談』、澁澤榮一編、大久保利謙校訂、平凡社、東洋文庫、76、1989、20頁。

「予さらに、吉井幸輔以下同藩の名ある者数人を挙げて、『この人々に拮抗し得る者ありや』と、次々に尋ねるに、伊賀守また有りということ能わざりき。因りて余は、『このごとき有様にては、戦うとも必勝期し難きのみならず、遂にはいたずらに朝敵の汚名を蒙るのみなれば、決して我より戦を挑むことなかれ』と制止したり」。

されども、板倉・永井等はしきりに將士激動の状を説きて、『公もしあくまでもその請を許し給わずば、畏けれども、公を刺し奉りても脱走しかねまじき勢いなり』という⁽¹¹⁾。

幕臣の激昂、到底抑止しえぬほどの状況になっていたことは、この談話から想像できるが、注目すべきことは、慶喜が冷静に戦闘行動に訴えてまで政権維持をはかろうとしたかどうかという点であろう。

すでに論述したように、福澤は、その『瘦我慢の説』において、「左れば当時、積弱の幕府に勝算なきは我輩も勝氏と共に之を知ると雖も、士風維持の一方より論ずるときは、国家存亡の危急に迫りて勝算の有無は言ふ可き限りに非ず。……然るを勝氏は豫め必敗を期し、其未だ実際に敗れざるに先んじて、自から自家の大権を投棄し、只管平和を買はんとて勉めたる者なれば、兵乱の爲めに人を殺し財を散ずるの禍をば軽くしたりと雖も、立国の要素たる瘦我慢の士風を傷ふたるの責は免かる可らず」として、勝の責任の重大さを訴えてやまない。だが、この場合、主公たる將軍慶喜にはまったく戦意がなく、その動機はおそらく、国際情勢にたいする独自の認識と行詰れる封建体制への絶望感、そしてより根元的には、彼の教養を支える水戸学にみられる尊王の思想であったと考えられる。その点からすると、福澤の云うところの「其未だ実際に敗れざるに先んじて自から自家の大権を投棄した」のは、慶喜その人であり、勝が当初からいわゆる「恭順派」ではなく、むしろ恭順を主張する主公慶喜に従ったものであると言えよう。この経緯について、つぎのような談話が物語られている。

「予、開陽丸に搭じて江戸に帰る時、船中にて、この上はひたすら恭順の外なき旨、はじめて板倉以下に申し聞けたり。もちろんこの決心は既に大坂を発する前に定まりいたれども、当時はいささかもこれをば漏らさざりき」⁽¹²⁾。

この文章だけ読むと、慶喜が最初から官軍に抵抗する意志はなかったという意味にとれるが、しかし長州遠征にみられるように、長州軍が天皇の軍隊となる以前には、必ずしもそうではなかった。すなわち長州を征服した後に、天皇を戴いて徳川氏中心の新政権を構想していたとも考えられる。その心中は複雑というほかはない。ただ、慶喜が、幕府の最終段階において、もっとも忠実な幕臣

(11) 上掲書、20～21頁。

(12) 上掲、21頁。

のひとり勝について、つぎのように語っているのは、味わうべきであろう。

「されば帰府の後、勝安房守、予に勸めて、『公もしあくまで戦い給わんとならば、よろしくまず軍艦を清水港に集めて東下の敵兵を扼し、また一方には薩州の桜島を襲いて、敵の本拠を衝くの策に出ずべし』といたれども、予は、『既に一意恭順に決したり』とて耳をも傾けざるより、勝も『しからばそれなりに尽力仕るべし』とて、遂に西郷吉之助と会見して、江戸討入りを止むに至りしなり」。

この叙述にみる限り、勝海舟の恭順そして江戸城無血開城は、主君たる徳川慶喜の意向にそって行動したものであり、將軍の決意如何によっては、薩摩・長州の征討軍と徹底的に交戦する意図をも秘めていたことが窺われる。だが、戦略家として勝の胸中には、薩摩・長州軍（官軍）対幕府軍という政権争奪をめぐる軍事的対立の構図よりは、イギリス、アメリカ合衆国およびフランスなどの西欧諸国による対日外交主導権の争奪に強い関心が向けられており、とりわけ幕府の政治に強い影響力をもっていたフランス公使ロッシュと日本担当書記カシヨンの行動には深い警戒心を抱いていた。

すでに、英国公使パークス（Harry Parkes）は、グラバー商会を通じて薩摩および長州の要人、たとえば伊藤俊輔（博文）、志道蘭多（井上馨）等を知り、英国がこの西南雄藩に接近するなかで、幕末日本の政治的抗争が、急速に国際的色彩を帯びてくるのではないか、ということをも勝は深刻に危惧した。このように日々深まっていく国内外の情勢を前に、勝は、長州征討などは、絶対に避けなければならないと考えていたのではなかろうか。

勝が主君、徳川慶喜の意思に従って行動したのは、封建的な主従関係における、絶対服従という武士の軌範に忠実であったということは、もちろん考えられる。しかし勝の日記を通じて痛切に訴えられている徳川武士集団の行動批判は、まさに封建的なモラルを超えて、近代的な市民社会の道徳にもとづく世界観に近いものを感じさせる。

そこで、日記を通じてこの点の究明に入ることにしよう。

三

幕臣勝海舟にとって、もっとも気掛りなことは、倒幕を企む薩摩および長州の動向と、勤王を旗印しとして次第に朝廷に接近しようとする土佐藩の活動であった。これに対抗する幕府の内部では、具体的な方針を樹立することに消極的な要路の人々が、ともすればフランスの力に依存し、その結果、日本が国際的紛争に捲き込まれることを、彼は深刻に憂慮した。『慶応四戊辰日記』二月廿五

(13) 上掲、21頁。

(14) くわしくは、拙著『英国外交官の見た幕末日本』、176～182頁を参照されたい。

日に、勝は、つぎのようにその感概を吐露している。

「此日記、大事件に関係する、上意^{なろび}并に我が愚存、或は他之間答等を抄記す。就^就中正月十日頃迄は他事にして（多事の誤りか……引用者）、帰宅夜半に及び、また徹夜もしばしば也。其中來人之多き、日夜四、五十名に下らず、大抵、我が心裡を疑ひ、殺気を^帯るの徒なり。半睡半覚そゝろに筆にまかせて筆記す。若し暗殺せられて後、人間^{じんかん}に示さば、欺かざるの心を知て、非命の死を憐察せよ」。

海舟の日記は、記録者の日常を記したいいわゆる日記とは趣きを異にし、まず訪問者の動静や見解、自己の所信表明のみならず、幕閣にたいする意見具申あるいは將軍慶喜に直接宛てた上申書などが克明に記されている。史料的な価値がきわめて高いと考えられる所以である。一方において薩摩、長州、他方、フランスの動きを凝視し、日本の前途を沈思しているのである。

「小臣、去歲丙寅^{へいゐん}之暮（慶応二年……引用者）東帰せりといへども、上下の機忌^{はははだしく}甚敷、空しく官途に在らむも心くるしきの餘り、閣老稻葉公、切にこれを留めて、御免之事なし。また参政大関肥後守〔若年寄黒羽藩主大関肥後守増裕……編者注〕は、頗る気概あり。当時之当員、聚儉（聚斂の意か……引用者）甚敷して、下者之心を離せんことを憂ひて、頻に内命あり。志を奮いて忠諫せむとす。如何せむ、言語壅塞^{ようそく}して通ぜず。司農小栗上野〔勘定奉行小栗忠順〕、小野内膳〔小野友五郎〕が輩^{ばい}拔扈して、上者是に^は壓せらる。氣を張て進言する者無く、雷同して党あり。此輩見る所、規模狭少にして、天下の大勢を深察せず、私郎察^{ひらんさつ}に頼みて大いに国内を平吞せんとす。誠に其力を量らずして、終に邦家の災いを発せむ歟」。

ここにふれられている小栗上野介忠順は、対長州強硬論者として知られ、小野友五郎は、福澤諭吉の上司として、一八六七（慶応三）年、使節として渡米した幕臣であり、勝のこの文面からすると、やはりの強硬派であったことが窺われる。

『海舟日記』は、慶応三（1867）年十月頃から幕府断末魔の様相が次第に明らかになった四年二月頃までの経緯について、とくに克明にふれている。すなわち、

「丁卯^{ていぼう}十月廿二日 友人来訪、いう。京都にて当月十三日、御参内あり、形勢言上之事あり、同日列藩にも御趣意御布告ありしと云。且^{かつ}、薩州、土州もまた人数を率ひて京師に馳登るべしと」。

物情騒然たる京都の状況を髣髴とさせる文章はなかろうか。これは要するに、京都において、朝廷を中心に、幕府と薩摩勢力との間の緊張が最高度にたかまり、薩長側は討幕の勅許を得たとして運動し、幕府は、第二次長州遠征によって機先を制しようとする動きを濃厚にしていたことを背景

(15) 勝海舟『幕末日記』、『勝海舟全集』I. 6頁。

としている。勝は長州遠征には終始反対であった。

「長州家御処置に附て、昨年、小臣、密かに上告する事あり、終に内変に及ぶべきをおもひて、切に是を言上せり。当時、諸官また別に見る処ある歟、終に御採用の御事なし。ゆへに進退如何とも成すべき能はず、終に東帰を懇願せるなり」⁽¹⁶⁾。

一旦、長州遠征にふみきるならば、内戦勃発は避けがたく、その結果は、外国勢力の干渉を招き、日本の前途は、きわめて危い状態に立ち到る、というのが勝の情況認識であり、その観点からしても、長州遠征は企てられてはならないと彼は考えていた。その兆候ともとれるのは、外国勢力が攝津湾（大坂湾）に軍艦を派遣し、すでに動員態勢に入った幕府の長州第二次遠征を牽制するかのよくな戦術をとっていた。十二月五日、つぎのように記している。

「大阪に遣被し開陽艦内、矢田堀讀岐〔軍艦奉行並〕より書状あり、云。此頃兵庫、大阪には、英、米併せて十二、三隻、内商船は一隻にて悉く軍艦なり。諸藩之船、我艦を併せて十八隻。昨日午後、明石之方より、薩州、芸州之蒸気船、長州之帆前船三隻を引き、合せて九隻尼ヶ崎に入る云々。西国之諸藩、入京之人数、頗る多しと」⁽¹⁷⁾。

幕府にとって、情況は、容易ならぬ段階にすでに達していた。後にのべるように、福澤は、いわゆる尊王攘夷の立場から、外国勢力と対決姿勢を崩さなかった長州にたいして、その再征を主張する要路の人々と意見を同じくしていたが、勝の態度は一貫して長州再征反対であり、むしろ長州と和睦することによって、国内世論の統一をはかり、外国勢力に当ろうとするものであった。こうした和平政策の背景には、ひとつに外国認識の差異、第二には、幕府権力の危機的情況にかんする冷静な判断、そして第三に、勝の広汎な情報網、すなわち幕府閣僚をはじめ、徳川家譜代の重臣たちとの奥深い交友関係、殊に越前藩主、松平春嶽に代表される開明派からの厚い信頼、そしてさらに、本来、徳川家と敵対的な立場に立つ薩摩、長州など西南雄藩の活動的な志士たち、すなわち西郷吉之助、大久保一蔵、伊藤俊輔、志道聞多、坂本龍馬などとの接触、およそこのような複合的且つ多面的な人間的接触からえられた多種多様な情報の確保は、幕府の命運が旦夕に迫り、長州再征という冒険的な試みは水泡に帰すであろうということ、その結果、京都からの最新の情報として、慶応三年十二月、幕府政権の瓦解に瀕していることを知らされることとなった。同月十五日の項には、つぎの如く記されている。

(16) 上掲書、7頁。

(17) 上掲、7～8頁。

「十二月十五日 友人に聞く、京師にて毛利父子御免、職掌元の如し。三条殿初復職之御事仰せ出被、会津、桑名は願ひに因りて御役御免あり。宮闕九門は、越前、藝州、薩、土州、備前家之人数、戎装白刃を以て固む。頗る殺気あり。兩天奏、攝政殿下も其職を放たれりと。我^我君上も、將軍の御職を御辞退ありしと云。嗚呼天下の安危、近日に逼れり、今日に到て、また小忌機⁽¹⁸⁾を避くるに処あらむ。此夜一書を記して、閣老稻葉公に呈す。云」。

慶応三年十二月の時点で、幕府の命運は尽きようとしていた事実を、確認しているわけであるが、この文中、徳川慶喜の將軍職辞退という、およそ世間一般の意表をついた行動は、朝廷はもちろん、これを支えていた薩摩および長州をも驚かしたことは勿論、当時は、何人もその意図が奈辺にあったかを計り知ることはできなかった。

この時期、英国公使館付き書記官アーネスト・サトウ (Ernest Satow) は、この間の経緯について書き残している。

「十一月十六日（慶応三年十月二十一日）の眞夜中、外国奉行の一人、石川河内守がハリ一卿（英国公使 Harry Parkes……引用者）をたずねて来て、大君は政治の大権を天皇に返還したので、今後は天皇の命令の執行機関に過ぎなくなるだろうという、重大な情報をつたえたのである。われわれはすでに他の方面から、大君が退位して將軍職はなくなるだろうということを耳にしていた。すでに、この月の十四日に小笠原老岐守（老中小笠原長行……引用者）は、内々でわれわれに対し、今後政治の大綱は有力な諸大名の会議によって立てられ、大君の決裁は天皇の認可を受けなければならなくなると、告げたのである。慶喜が実際に將軍職を辞した日は十一月八日であった⁽¹⁹⁾。

「今後政治の大綱は有力な諸大名の会議」によって立てられるとのべられているが、これはあくまでも老中小笠原老岐守の口を通じて伝えられたもので、果して慶喜の真意であったかどうか疑問である。むしろ老中がハリ一・パークスに語ったことが、印象的である。

「老岐守は、それから二日後にハリ一卿と、会見した際、大君がどうして政治を天皇に返還することを決意するに至ったかについて、その原因を書いた長い文書を読み上げた。……それによれば、慶喜は徳川一門の統領を辞したのではなく、単に將軍職を辞任したに過ぎない⁽²⁰⁾。

將軍とはいわゆる征夷大將軍として、武家の頭領たる地位であるが、徳川慶喜がこの職を辞したとなれば、徳川家は、日本最大の大名という資格を有するだけとなり、慶喜は、日本国全体の政治

(18) 上掲、8頁。

(19) Ernest Satow, a Dipolomat in Japan, London, 1921, アーネスト・サトウ「一外交官の見た明治維新」, 坂田精一訳, 岩波文庫版, 1991年, (下), 81頁。

(20) 同上, 81頁。

にかんする一切の権限を失うことになるのは、明らかである。恐らく慶喜の胸中には、各大名をもって構成される議会のようなものを構想し、徳川家一門から大統領を選出することによって、この急場を救おうとしたのではないかと、想像されるが、その意図は、この時点では、必ずしも明らかではない。

サトウは、「勝安房守は私たちに、大君派が事を早まった結果、内乱が勃発する恐れがあることを懸念していると云った」と語っている⁽²¹⁾。これはまったく日記の内容と符合する。勝がもっともおそれたのは、内戦の勃発とその結果としておこりうる外国勢力の干渉であった。外国の内政への介入を防ぐためには、内戦は何としてでも避けなければならない。一度、將軍職を返上し、大政奉還を決意した以上は、幕臣たる者は慶喜の意図に副って行動し、薩摩・長州と干戈を支えることだけは何としてでも避けなければならない、というのは勝の信念であった。稲葉閣老に宛てた書簡のなかで、彼はつぎのように訴えている。

「若此英意を御継述遊ばされ候儀に候はゞ、盲動の御挙之無く、御指令務めて正大、暫く都下^{きよ}並びに八州之御鎮撫を以て、益厚く御所置御座有り度しと存じ奉候。

○戦鬪之一途は、臣愚^{ひよか}竊におもう、今之侯伯、其胆識遠圖、我、君上之右に出候者之無し。天下の大政、衆議に出候儀に候はゞ、是を主裁する者、亦何人ぞ。必らず君上をして大御主裁たらしむべし⁽²²⁾」。

朝廷にたいし、幕府が恭順の誓いをなし、その任務を、江戸城下および関八州の鎮撫に専念にとどめて、天下の人心を鎮静させるならば、衆議世論の一致するところ、結局、慶喜公が天下の大勢を掌握することになるであろうとのべ、しかしそれにもかかわらず、倒幕勢力が、幕府の非を鳴らして、勤王の名の下に幕府に敵対的行動に出るならば、そのときは、大義名分を樹てて、薩長と一戦を交えるべきであるとする。

しかしこの稲葉閣老宛て文書は、結局、老中の手許には届かなかった。「此書付、閣老稲葉殿迄上達を乞ふ。然るに諸官、我進退を疑ひ、たへて事を明さず、其上達如何を弁ぜず」という状態で、勝の意図は無視された。勝の日記を読んで、特に感銘させられることは、彼が徳川幕府という一政権の帰趨よりも、日本国という国民国家としての観念をもっていたことで、至るところに、皇國、皇国一和、などという文言がみられることである。この点、同じく幕府海軍の総帥として重きをなした榎本武揚とは対照的であった。勝の態度は、あくまでも戦略的であったのにたいし、榎本はむしろ戦術的であったといえよう。

榎本がこの時期、すなわち十二月十四日付で、勝に送った書簡には、その差異が明瞭に現われて

(21) 上掲、82頁。

(22) 上掲『勝海舟日記』、8頁。

いる。日記に引用されているのは、重要な部分の抄録であるとされているが、引用してみよう。

「順動便船を以て走筆、^{すんちゆう}守楮拜呈し奉り候。然らば目今、天下の形勢実に痛哭すべく、流涕長大息事に御座候。其^{てんまつ}顛末并に一、二之首見を申し上げ度候得共、とても筆し難く候間、其大略を挙げ、左に申上げ奉り候」。

この冒頭の一節にみる限り、榎本は、慶喜の將軍職辞任は、あたかも晴天の霹靂の如く感じられ、豫期しない事態が突如出現したという心境であったと考えられる。勝にとっては、「ついに来るべきものが来た」という覚悟の感慨であって、すでにみたように稲葉閣老に、徳川幕府のこれにたいする対応策について、意見具申するほどに冷めた眼で、現実に取りつつあった事件の推移を直視していた。この両者の態度の差こそは、一方は慶喜に従って恭順の姿勢を持し、平和裡に江戸城を開城する方針となって現われ、他方、榎本は、箱館五稜廓に拠って、明治政権と闘う結果を導き出すのである。榎本書簡は続く。

「兼て御承知も在らせられるべく候通り、四藩並びに其外同意諸候の見込、^{ひたいよ}弥去九月下辭、土州より建白に相成候。京攝間刺客公行、物議紛然、是に於て、大君殿下兼ての御見込も在らせられ候御儀と相見、王政復古之御願書相出候より、京師少くは靜謐らしく相聞候処、今度公の諸候次第に上京、^{なんづぶく}就中、薩は不軌を圖り候事跡之有由、紛々議論有之候処、今度、兵庫、大坂開市之期も相逼り候に乗じ、去月晦日、長州勢、西の宮に嘯^{みそか}聚^{しやうしゆう}仕り、夫より去る八日悉く上京、其人^{びかり}数大凡千五百人許。長州官位復古、入京御差免之命降る。同九日夜、將軍職御辞退之命下る」。

榎本は、事態の推移を平静に記述しているが、つぎに、この後におこった容易ならぬ情勢の変化に、驚愕の表情を露わにしている。

「同九日夜、將軍職御辞退之命下る。翌十日、会（会津若松藩……引用者）は、守護職御免、桑（桑名藩……引用者）は、所司代御免となる。同日、薩主参内、嘉陽宮（賀陽宮朝参のこと。但し嘉陽は榎本の間違い……引用者）幽せらる。九門之固めは薩、芸等にて、白刃、槍砲杯携え、既に我二条御城に逼らんとするの形跡ありしと云。是に於て、同日より翌十一日、引続きて官兵は勿論、会、桑、薩、伊、紀等の兵、皆二条御城内外に屯集し、^{かざり}箕を燃やし、徹夜不眠、今にも打出んとするの勢ひ顯然たり。市中之老若相^{ひま}脣^{ひま}いて東西に奔るもの、向背相望む。蓋し、此時、幕府方之^{りだ}頼母^{たのもし}敷諸候は、皆、戦に決せし由、政府は戦に御決定の命なかりしと云。されども、京師一円、戰場之如く、人々自ら安んぜず、尤も、時勢の是迄過ぎ候を、当路之外は更に知る者なきを以て、驚駭尤も甚しと云」。⁽²³⁾

(23) 上掲、9～10頁。

さまざまな情報を総合して、勝にとっては「来るべきものが来た」と観念されたのにたいし、榎本にとっては、恰も「寝耳に水」のように感じられたのではなかろうか。一方は政治家としての感覚、他方は軍人としての判断であったかもしれない。再び榎本の書簡に戻ろう。在京の諸大名としては、薩摩、土佐、芸州、長州、紀伊、尾張、会津、桑名、松山、大垣、藤堂、井伊、榊原、越前、加賀、因州、備前の諸侯であった。

「此内、我徳川氏方の者は、会、桑は申込も之無く、井伊、紀州、藤堂、大垣、加賀等は、皆国力を奮て、我を助くると云、土州、越前は中立不依と云、因、尾、備は傍観、芸は勿論、長、薩の手間取と相聞。嗚呼我徳川之兵は、前之頼母數諸侯之兵を並算する時は、薩、長、土、芸等に大凡三倍す」。

注目すべきことは、榎本が確認した布陣からすると、土佐、山内家が中立というのは理解できるが、親藩（家門）としての越前が中立、尾州、すなわち御三家筆頭ともいべき尾張藩が、「傍観」と記されているのは、奇異な印象をうけるであろう。これは何を物語るものであろうか。

越前の藩主は、開明家として名高い松平春嶽（慶永）であり、徳川家の支配が終焉を迎えつつあることを認識していて、勝も春嶽と思想を同じくしていた。尾張藩については、將軍継嗣の点では、御三家の最上位に在りながら、紀伊および水戸に制せられ、とくに一橋家出身で、宗家を継いだ慶喜にたいして、冷やかな態度を持したものと考えられる。

榎本にとって衝撃的であったのは、徳川幕府を支えてきた京都所司代や守護職が廃せられ、こうした制度改変のなかで、徳川氏がどのような役割をあたえられるのか、不明であることであった。

「^{きょう}緒、前文之割振、其不公平に相聞候へども、我徳川氏は如何相成候事に哉、一向相分り申さず、物情沸くが如くに御座候。小生事、当月朔日^{ついたち}より去十一日迄上京到居、傍聞仕候処、右之通に御座候間、此段尊公而己⁽²⁴⁾を限り申上候儀に御座候」。

徳川家という旧来の政治機構の頂点に位した一家族の運命こそ、榎本の最大関心事であったのにたいし、勝は、幕府倒壊後の必然性を理解し、その先の日本国家の有り様を模索し、想い描いていた。しかしこのような遠大な計画は、当時の誰人によっても共感をもって迎えられるはずがなく、それどころか、幕臣の間では、勝は裏切者として、はげしい憎しみと反発の情をもってみられたのであった。すなわち、彼自身が後に語っているように、しばしば暗殺の危険に遭遇したことも少なくなかった。何故にそれほどまでに憎まれたのであろうか。おそらくそれは、当時の幕府要路の人々のなかでも稀な広範囲な交友関係と、幕府が直面していた難局打開のために、齒に衣着せぬ辛辣な提言であったと考えられる。その点で、十二月二十三日の日記は、意味深長であらう。長文で

(24) 上掲、11頁。

あるが、引用することにしよう。

「同（慶応三年のこと……引用者）廿三日 二之丸火あり，登城。兵部殿（老中格海軍総裁 稲葉正巳……編者注），主膳殿（若年寄海軍奉行京極高富……編者注）に当今之大事を陳述す。閣老答て云，『其許之申建る所，頗る善といえども，諸官の嫌忌甚敷，其実は，薩，長二家之度に遊説するに疑あり，近日退職然る可し之旨盛なり。暫く時之到るを待れむ歟』と」。

ここには明らかに，幕府内部で，勝は薩摩および長州と通ずるものであり，「勝を斬るべし」という物騒な世論が，幕臣の間に形成されつつあったことを物語っている。勝は何故，本来，同志たるべき幕臣の間で評判が悪く，且つ仇敵の如く憎まれることも稀ではない存在となったのであろうか。それは，以下の日記から読み取ることができる。

「爰に到りて亦何をか述べむ。知己の乏敷，豈我老人ならむ哉。天下有識之者亦幾許ぞ，皆志を得ずして，草莽に老死す。小吏天下之大勢を知らず，己れに倣するを悦び，其説に迷ふを悪む。今哉狎邪之小人，家邦を危くす。其急，実に燒眉よりも甚敷，依て退職を乞ひ，併せて憤言一書を呈す」。

おそらく勝は，閣老とともに幕政を左右する地位にあった小栗上野介忠順や小野友五郎等の，外国勢力，とりわけフランスとの協調を維持しつつ，徳川幕府の権勢を振興しようとする政策にたいして，絶望的な感慨を抱いていたのではなかろうか。そうした激烈な感情の流露は，「海舟狂夫」という署名からもその内容を推量しうる以下の上奏文において，みることができる。

「後来，天下之大権は，門望と名分に帰せずして，必らず正に帰せん。私に帰せずして，公に帰するや必せり。何ぞ又，毫も疑を存せんや。其速に一正に帰せざるものは，士夫不学なると鎖国之陋習に心酔すればなり。今世，外国往来容易にして，下民四方に行く。爰を以て，風化日に新に，従前之比にあらず。下民日に明に，上者日に暗らし。区内之紛擾，爰に於て起る。膠柱之陋法，如何ぞ能く之を垂御し，一静を得るに足らむ」。

ここで読者に感銘を与えるものは，政権というものは，門閥が私的に所有するものではなく，公のものであるという指摘と，一般大衆の民度の向上はいちじるしく，これに比べると，幕府支配者の方がはるかに遅れ，天下の形勢や世界情勢に暗い，と主張していることである。勝は，朝廷と幕府との政権をめぐる争奪に奔走する，いわゆる志士たちと徳川家の重臣の間に，政権が何物であるかという意識は強烈でありながら，その行政の機関ともいべき政府について，ほとんど認識を欠いている点を指摘し，近代的国家論を展開していることに注目しよう。

(25) 上掲，11～12頁。

「近五、六年、唯天朝、幕府云々を以て口実し、其間自から隔絶の思を成す者、万にして万、上侯伯より下士民に到るまで、京攝に奔走し、江都に周旋す。終に政府何者たるを知らず、恣に国是を定めんとす。是、唯名分に迷目して、真に国是を知らず、政府如何を深察せざるの誤也」。

ここで読者の注意を喚起しておきたいのは、勝が用いている「政府」という言葉である。この当時、政府といえは幕府のことであり、封建諸侯は、それぞれ地方政権を代表するもので、一見、政府のようであるが、幕府権力者も諸大名も、政府の何たるかを理解せず、従って、幕府も真の政府ではないという勝の見解は、示唆に富む。

一体、当時、この「政府」なる概念を、誰がどのようにしておしひろめたのであろうか。われわれが思い到るのは、幕末、いわゆるベスト・セラーとして歓迎された福澤諭吉の『西洋事情』であろう。政府とは、いうまでもなく、英語の Government の邦訳であるが、『西洋事情 初編』が、慶応二（1866）年に、翌慶応三年に『西洋事情 外編』が出版され、そのなかで、政府の本質やその職分について、かなり明確に論述していることを考えると、福澤は、もっとも早い時期に、Government というヨーロッパ市民社会における政治の核心ともいうべき概念を、適確にも「政府」と訳した一人であったことは疑いえない。その『西洋事情 外編』巻之二 には、福澤は、「政府の種類」、「国法及び風俗」、「政府の職分」という三本の柱を樹てて論じている。とくに「政府の職分」についてつぎのように云う。

「政府の職分は、国民を穩に治め、国法を固く守り、外国の交際を保つ三箇條を以て其大綱領とす。此綱領を越て、他に行ふ可き事件と行ふ可らざる事件とに付き、学者の議論一定せず……」⁽²⁶⁾。

勝は、政府の職分について、どのように考えていたのであろうか。

「夫政府は、全国を鎮撫し、下民を撫育し、全国を富饒し、奸を押え、賢を挙げ、国民、其の向う処を知り、海外に信を失なはず、民を水火の中に救ふを以て真の政府と称すべし。たとえば華聖の国を建るが如く、天下に大功あって、其職を私せず、静撫宜敷を失はざるは、誠に羨望敬服するに堪へたり」⁽²⁷⁾。

福澤の政府論と勝のそれとを比較すると、双方とも政府の本質に迫っている点では共通しているが、福澤は、政府の名において、国民の日常生活や自由な態度を妨げることがあってはならないと云う。

(26) 『福澤諭吉全集』第一巻、慶應義塾編、昭和34年、433頁。

(27) 『勝海舟全集』1、『幕末日記』、12頁。

「……人間交際の基本は、人々^{みづ}躬から其心力を勞し躬から其責に任ずるに在り。是即ち人間自然の性情なるが故に、若し外より来て此大義を間然するものあれば、必ず其弊害なきこと能はず。

故に政府たるもの、日夜^{よじ}孳々^じ（汲々が正しい……引用者）として、国民の動静を思慮し、之が爲めに周旋せんとするは、^{なだ}雷に其民の煩を爲すのみならず、有害無益、過分の勞と云ふ可し。よく世間の事情に着意せる政府に於ては然らず。廟堂の上に立て国内の事務を司る者は僅に数人にして、其⁽²⁸⁾職掌は敢て民間の缺乏を知らんとするにも非らず、亦其缺乏を探索して之に給せんとするにも非らず」。

この福澤の思想を、勝の政府の役割についての具体的な把握、「全国を鎮撫し、下民を撫育し、全国を富饒し、奸を押え、賢を挙げ、国民、其向ふ処を知り、海外に信を失なわず、民を水火の中に救ふを以て眞の政府と称すべし」という叙述と比較すると、両者の政府観には相当の隔たりがみられる。勝のこのような姿勢は、官軍の江戸城攻撃を前にして、单身、西郷隆盛との会見に臨み、江戸城の無血開城を実現することによって、江戸市民を塗炭の苦しみから救うという行動に結びつくのであるが、福澤の論理は、古典派経済学に代表される自由主義的国家論によって貫かれている。何故に、このような対照的な国家の把握が現われるのであろうか。思うにそれは、等しく下層武士階級出身であるとはいえ、一方は、『西洋事情 初編』に代表される比較的自由的言論人、他方は、断末魔の状況下の幕府海軍奉行、のちに陸軍総裁を命じられるという枢要な地位にあって、日本国の将来についてその構想を異にしたのは、むしろ当然であった。日本が、いわば累卵の危機的状態にあったときの、この二人の巨人の立場が、その後の彼らの人生観あるいは世界観を決定的に異質なものとした背景であった。そこでこの点について追究することにしよう。

四

慶応四（1868）年正月の日記に、勝はつぎのように記している。

「慶応戊辰四正月

京師不穩之沙汰紛々、東兵を^き送⁽²⁹⁾くりて、不羈を討たむと云説盛なり。是が爲に聚儉（聚斂か？……引用者）之説興り、民心離散す」。

すでに慶応三年一二月二五日、江戸防衛の任にあった庄内藩は、かねて江戸市中において乱暴狼藉を働く薩摩藩士（浪士）を攻撃、薩摩藩邸を取り囲んでこれを焼き払った。勝の日記に、「同（慶応三年……引用者）廿五日藩邸を取^{ばかり}囲む。是、此程より浪士貳百計集居、夜中強盗を事とし、

(28) 前掲、『福澤論吉全集』第一巻、434頁。

(29) 前掲、勝海舟『日記』、14頁。

或は近郊に出入りして、集金之事聞えたるを以てなり。火して大抵遁げ去る⁽³⁰⁾』とあるのは、このことを指す。

江戸のこの物情騒然たる情勢は、一二月二三日、江戸城二ノ丸の焼失事件以来、ますます甚だしさを加え、慶喜が薩摩・長州側と一戦を交えることを決意するに至って、決定的なものとなった。当時、慶喜は大坂城に滞在、幕軍の総指揮をとるつもりであったが、一月三日、鳥羽伏見の戦いで幕府軍が敗退するや、直ちに一月六日、軍艦開陽丸で大坂湾を脱出、江戸に帰還し、勝は品川で迎えた。『日記』はつづける。

「十一日（慶応四年一月）開陽艦、品海に錨を投ず。使ありて、払曉、浜海軍所に出張、御東帰之事。初て伏見之転末を聞く。会津侯（前京都守護職松平容保……引用者）、桑名侯（前京都所司代、松平定敬……引用者）ともに御供中にあり。其詳説を問はむとすれども、諸官唯青色、互いに目を以てし、敢て口を開らく者無し。板倉閣老（老中板倉勝静）に附て、其荒増^{あらまし}を聞くことを得たり。是^{こゝ}從^{したが}して、日々空議と激論と、唯、日を空敷くする而已⁽³¹⁾、敢て定論を聞かず」。

京都における幕府軍の敗退に衝撃をうけたのは、ひとり勝だけではなかったが、しかし勝は、これをもっとも深刻にうけとめたひとりであったにちがいない。何故なら、彼はこの重大な時期に海軍奉行並を命じられ、東下しつつある薩長軍と、どのように涉り合うか、もっとも困難な任務を課せられたからである。

「同十七日 夜俄に海軍奉行並命ぜ被る。且て京師より問罪の官軍東下す。三道の小侯（東海、東山および北陸道に副って領地をもつ小藩）、議論紛々といへども、多くは駆役せられ、或は其城邑を焼かむと云う説、日夜堪えず。東府之諸士は、軍を率^ひて、箱根、笛吹に待たむといふ者あり、或は軍艦を以て大坂を衝かんと云。紛々擾々、其方向を弁⁽³²⁾ぜず」。

重責を負った勝の苦悩が直接に伝わってくるような一節であるが、この時期、福澤はどこでどのように考えていたのであろうか。福澤は、往時を回想して、つぎのようにのべている。

「扱慶喜さんが京都から江戸に帰て来たと云ふ其時には、サア大変。朝野共に物論沸騰して、武家は勿論、長袖の学者も医者も坊主も皆政治論に忙しく、酔へるが如く狂するが如く、人が人の顔を見れば唯その話ばかりで、幕府の城内に規律もなければ禮儀もない。平生なれば大廣間、溜の間、雁の間、柳の間なんて、大小名の居る処で中々喧ましいのが、丸で無住のお寺を見たやうになって、ゴロゴロ箕座を掻いて、怒鳴る者もあれば、ソット袂から小さいビンを出してブランデーを飲んでる者もある

(30) 前掲、14頁。

(31) 前掲、14～15頁。

(32) 前掲、16頁。

と云ふやうな乱脈になり果てたけれども、私は時勢を見る必要がある。城中の外国方に用はないけれども、見物半分に毎日のやうに出て居ました……⁽³³⁾」。

江戸城内の異常に緊迫した状況の描写の点では、勝と共通するものがあるけれども、ここにみられるものは、幕臣とはいえ、中津藩出身の陪臣であるという観点から、福澤の視点はきわめて冷静で、迫り来る幕府倒壊の事態にたいする危機感がまったく感じられない。尤も、勝の日記は、幕府中枢の執行機関の責任者として赤裸々に感慨を、そのまま書き綴ったものであるのにたいし、『福翁自伝』は、福澤の晩年、往時を追懐して語ったものであるため、この両者には史料的にみても同日に論じられない点は少なくない。しかし福澤のこの当時の心境は、十分に吐露されていると思う。それについては、やはり幕臣として、ともに蕃書調所で同僚であった加藤弘之の行動と比較しても、きわめて鮮明である。「城中の外国方に翻訳などの用はないけれども、見物半分に毎日のやうに城中に出ていた⁽³⁴⁾」という福澤にとって、真剣になって箱根の嶮阻に拠って薩長軍を防ごうという者から、種々様々の奇策妙案を献じ、悲憤慷慨の気焰を吐く論客のなかに入っているかにみえる加藤の態度が、余程滑稽にみえたにちがいない。

「云はずと知れた加藤等もその其連中で、慶喜さんにお逢ひを願ふ者に違いない。ソコデ私が、『今度の一件はドウなるだろう、いよいよ戦争になるか、ならないか、⁽³⁵⁾君達には大抵分るだろうから、ドウゾ夫れを僕に知らして呉れ給へ、是非聞きたいものだ」。

福澤の質問に訝かしく思った加藤が、その理由を訊ねると、

「何にするって分かっているではないか、是れがいよいよ戦争に極まれば僕は荷物を拵へて逃げなくてはならぬ、戦争にならぬと云へば落付いて居る。其和戦如何はなかなか容易ならぬ大切な事であるから、ドウゾ知らして貰いたいと云ふと、加藤は眼を丸くして、「ソナナ気樂な事を云て居る時勢ではないぞ、馬鹿々々しい」。「イヤイヤ気樂な所ではない、僕は命掛けた。君達は戦ふとも和睦しやうとも勝手にしなさい、僕は始まると即刻逃げて行くのだから、加藤がブリブリ怒ったことがあります⁽³⁶⁾」。

ここには、勝が幕臣として、起りつつある幕府の最後段階を、いわば真正面から直視し、身をもって収拾策を考え抜かなければならない立場にあったのにたいし、福澤は、加藤弘之の憤慨するように、身分の軽いこともあって、傍観者として事態の推移を斜めに眺めるだけの余裕をもっていた。

(33) 『福翁自伝』、『全集』第7巻 151～152頁。

(34) 前掲、152頁。

(35) 前掲、152頁。

(36) 前掲、152～153頁。

いかにしてこのようなやや皮肉な態度を持していられたのであろうか。

福澤はすでに幕府の前途を見透していた。だからこそ、このような放言をしたのだが、これについてつぎのように述懐している。

「全体を云ふと、眞実、徳川の人に戦ふ気があれば、私がそんな放語漫言したのを許す訳けはない。直ぐ一刀の下に首が失くなる筈だけれども、是れが幕末の形勢で、逆も本式に戦争などの出未る人気でなかった。

其前に慶喜さんが東歸して来たときに、政治上の改革とでも云ふか種々様々な役人が出未た。可笑しくて堪らない。新潟奉行に誰が命ぜられて、何處の代官に誰になる。甚だしきに至ては逃去て来た後の兵庫奉行になった人さえあって、名義上の奉行だけは此方に出未て居る。夫れから又御目附になるもあれば、御使番になるものもある。何でも加藤弘之、津田真一郎（眞道）なども御目附か御使番になって居たと思ふ。私にも御使番になれと云ふ。奉書到未と云ふ儀式で夜中差紙が来たが、眞平御免だ。私は病気で御座ると云て取合はない」。

福澤は、勝と同じく、徳川幕府の命運はすでに尽きたことを感じていた。しかし、その幕府について、福澤の観察は、幕臣には戦意が感じられない、という評価であったのにたいし、勝の場合、たとえ戦闘能力はあっても、戦ってはならない、という観点であった。

福澤は、幕府が「政治上の改革」を名として、新しく役職に就くことを加藤弘之や津田真一郎に命じ、彼らがそれをうけるのを冷然と見送っていたのだが、このような福澤の態度からすると、勝が陸軍惣裁に任じられ、やや戸惑いの感情を示しているのも理解できよう。

一月十一日、慶喜が、軍艦開陽丸で帰還して間もない十七日、勝は海軍奉行並を命ぜられ、更に廿三日の日記には、「夜中、陸軍惣裁若年寄仰付けらる」として以下のように記されている。

「小臣、陸軍は敢て望む所にあらず。然るに陸軍の士官等申す旨あり、固辞すれども免れ被れず。また申旨あり、一時に官位高きは、尤恐るゝ処、况哉 無能不才之身、其憚 少なからず、強て若年寄之儀御免を希ふ。終に止らる」。

この一節に徳川幕府崩壊前夜の様相が露呈されている。海軍奉行並に加えて陸軍惣裁、さらに若年寄という老中につぐ要職に擬せられるとは、勝もさぞ驚愕したにちがいない。幕府首脳部がいかに周章狼狽し、幕政が混乱の極に達していたか、推測できよう。

しかしそれにしても、勝がどれほど才氣煥発で有能であったにしても、本来、譜代の小禄大名が任ぜられるのが慣例となっていた重責、若年寄に、祖父が御家人の株を買ったことによって、よう

(37) 前掲、153頁。

(38) 勝海舟『日記』、18頁。

やく幕臣の末席にあった勝が要望されるということは、きわめて異例のことであり、また反面からみれば、勝にたいする慶喜の信任がそれほど絶大であったとも考えられる。あるいは幕政の重職を担うことが、そのまま、薩摩・長州勢力の標的とされることが明白である以上、いかに譜代の家臣とはいえ、避けようとするのが人情というものであろう。してみると、このときの勝の行動を支えた信念とは、一体何であったろうか。要約して云えば、彼は、この時点で、内戦すなわち徳川軍と薩長軍の軍事的対決は、絶対に避けなければならない、もし内戦が拡大し、その結果としてイギリス、フランスをはじめ条約諸国の干渉を招くような事態になるならば、日本の独立は危殆に瀕するという認識である。

福澤は、『瘦我慢の説』において、

「勝氏が和議を主張して幕府を解きたるは、誠に手際よき智謀の功臣なれども、之を解きて主家を廃絶したる其廃絶の因縁が、^{たまた}偶^{また}ま以て一旧臣の爲めに富貴を得せしめるの方便と爲りたる姿にては、假令ひ其富貴は自から求めずして天外より援けられたるにせよ、三河武士の末流たる徳川一類の身として考ふれば、折角の功名手柄も、世間の見る所にて光を失はざるを得ず⁽³⁹⁾」。

とのべている。ここには、多分に、三河武士の本分に逸脱した者への非難の論調は明白である。しかし勝の立場からすれば、外国勢力による内政干渉、これこそが直面するもっとも重要な問題であって、徳川家の存廃よりも、内戦の回避に彼のエネルギーはすべて傾けられていた。すなわち、福澤は、この時期、フランスの力を借りて、長州処分を断行すべきであるとする強硬論者であったことからすれば、⁽⁴⁰⁾勝の意見と真向から対立するものであることは、云うまでもない。彼がフランスの力をかりて薩長軍と闘おうとする姿勢を変えない小野友五郎や小栗忠順を非難していることから明らかである。要するに、慶応四（1868）年一月の時点で、幕府側が徹底抗戦の戦術をとり、江戸城開城に応ぜず、江戸市街を焦土と化す戦鬪を展開したとすれば、列国はどのような態度をとったであろうか、という問題である。勝は、明らかに「条約諸国は、これを機会として内政に干渉することは避けられない」とするのにたいし、福澤は、「そのおそれなし」という主張であろう。ここでは、今少し勝の日記を通じて、問題の核心に迫ることにしよう。

陸軍忽裁を命じられた直後、一月廿六日、フランス大使に面談、その後、慶喜に会い、意見具申を行った。

「此頃諸官員、

君上に拜謁して、各其志を以て上言す。大抵払暁よりして夜九つ時、或は徹夜、

君上之御焦慮また思ふべし。又、横議盛にして、其向ふ処定まらず。小臣輩に到ても、諸士、猶其説

(39) 福澤諭吉『瘦我慢の説』、『全集』第六巻 570頁。

(40) 福澤諭吉『長州再征に関する建白書』、『全集』第20巻 6～11頁、参照。

を聞き、其議を闡論す。是が爲に夜も大抵鴉を閉て止む⁽⁴¹⁾」。

福澤もふれているように、「いろいろな策士論客忠臣義士が躍起となって……何でもこれは富士川で防がなければならぬとか、イヤ爾うではない、箱根の峻阻に據て^{たごやま}三子山の処で賊を鑿しにするが宜い。……」などという処士横議の有様は、勝の江戸城内の描写と一致する。混乱は江戸城内にとどまらず、敗走者となって続々として江戸に到着した兵卒は、幕軍上京の折りに、京阪不穩の情勢に構えて新たに兵員を募集し、「町市に市兵を募り、近郊には農兵を募る」という方針であったために、「兵員多きに失し、生活^{なまひ}並びに居所とも、其養ふべき道を欠く」という状態で、「東歸之兵卒、食住便ならず、俸金充分ならざるを憤り、党を結びて脱走す、^{おとせ}凡千人に近し。錯乱紛擾甚敷して、是を御する道無し。日夜歎息奔走する^{のみ}而巳⁽⁴²⁾」。

幕臣の一部に戦意昂揚して薩長軍を迎え撃とうとする勢力があったとしても、勝の眼からすればそれは到底不可能であった。それにもかかわらず、なお外国の力をかりても、徹底抗戦を主張するとすれば、内戦は日本全土に拡大し、外国の干渉は避け難い。幕府の危機というよりは、日本の国運にかかわることと、勝は考えていた。二月朔日^{ついでち}の日記に、つぎのように記されている。

「此時之閣老は、松平周防守上座たり。閣老兼帯海軍惣裁稻葉兵部大輔、陸軍惣裁松平^{かいどののかみ}縫殿頭、参政某々。時之權威あるは司農にて小栗上野介、小野友五郎。此党数人、皆、是等に雷同。其因て来る所、其謂れ無きにあらず。弘朗西公使^{なごらに}并教法師カションと云者、能く官吏之情勢に熟せり。爰を以て、栗本安芸（鋤雲……引用者）の徒、尊信して其説に酔ふ。……其説に云、「長州、薩州は、後幕府に害あり、必ず是を滅せずんば害あらむ。我、弘朗西に頼らば、軍艦、武器及び金幣といえども、送り出して支ゆべからず」と。此故を以て、小吏其説を^{まこと}実とし、其毒に酔ふ、亦醒むる者なし。英吉利人^{いぎりす}是を知て、竊に其党を悪む。終に西国侯伯に遊説する者ある歟。亦内にして聚歛盛にして、市民日に離心す⁽⁴³⁾」。

要するに、幕府がフランスと結んで起ち向うならば、薩摩・長州は英国を頼み、内戦はそのまま内乱となり、結局のところわが日本は独立を失うと云う。このような表現は日記の至るところにみられる。同じく二月十七日、越前侯松平春嶽にたいして、家老本多修理を通じて呈出した書簡の一節に、つぎのような文言がある。

「古^{いにしへ}従り、東洋諸国、西洋各国之爲に蹂躪、内附せらるゝ者、皆、其同屬、邦内之小是非に^は噛み、終に其国家を失ふを察せず、私を逞くして、国を破るに出ざる也。今^{いま}哉、英吉利は兵庫にあり、仏朗察、米利堅は横浜に居て英之下風を好まず、魯^ろ國、豈此二国之下に附かむ。……誠に其眞意のある所、

(41) 勝海舟『日記』、19頁。

(42) 前掲、19頁。

(43) 前掲、20頁。

これを掌上に視るが如し。然るを思はず、侯伯黙止して、唯其領国を固守せんとす。是を其任といはん歟。且つ勤皇の真意、また何れに在るや。百歳にして公義定まる、斯の如きなるを報国といふ歟。印度、支那の轍、遠からず⁽⁴⁴⁾」。

以上において、勝の態度が、福澤から「瘦我慢の説」において非難したような単なる無血開城主義ではなく、実は、和戦両様の姿勢をとって、西郷隆盛を先頭とする東征軍に相対したという点こそ重要である。実に、幕府内に渦まく二つの勢力の葛藤を、福澤と勝がそれぞれその主張に反映させたものであると云うこともできるであろう。福澤と勝との対立の様相を、より明らかにするためには、幕末維新史についての深い洞察が必要となろう。

すなわち、勝と福澤との最初の出会、1860（万延元）年、幕府軍艦咸臨丸での体験、その後、福澤は文久2（1862）年、遣欧使節の一員としての渡欧とヨーロッパ諸国での様々な体験、そして最後に1867年、二回目の渡米、その前後、『西洋事情』の刊行によって、次第に文明批評家としての評価をたかめていく。

他方、勝は、幕府権力が衰えるなかで、その挽回に死力をつくしながら、反面、その行末をきびしく見つめながら、近代日本の前途を模索するという、それぞれが、独自の「武士道」を追求することとなる。この課題に立ち向かうことが、是非とも必要となろう。

（名誉教授）

(44) 前掲、21頁。